

知財業務を革新する純国産LLM「tsuzumi 2」：セキュリティとVision機能が拓くIPトランスフォーメーション

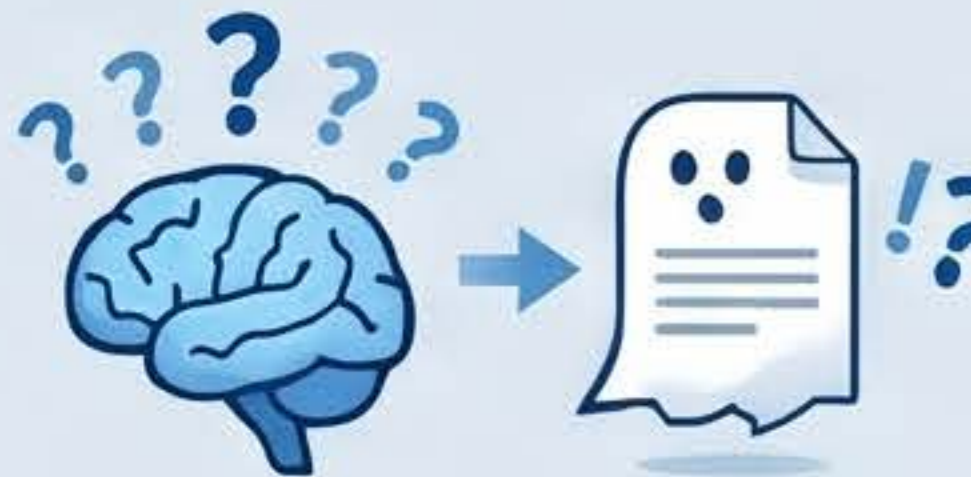
知財LLM導入を阻む「3つの壁」

秘匿性とデータ主権の確保



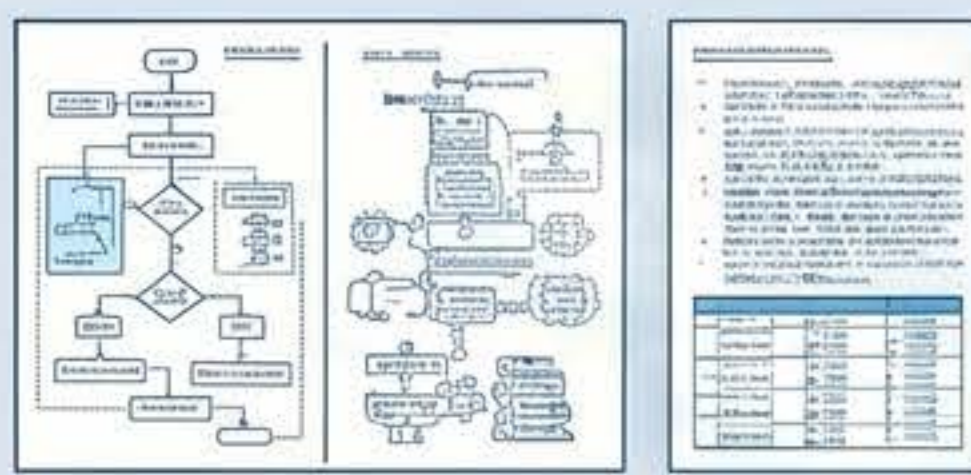
特許法上の「新規性」を守るため、未公開の発明情報を海外製クラウドLLMへ送付することはリスクが高く、国内オンプレミス環境での運用が必須条件となっている。

ハルシネーション(幻覚)のリスク



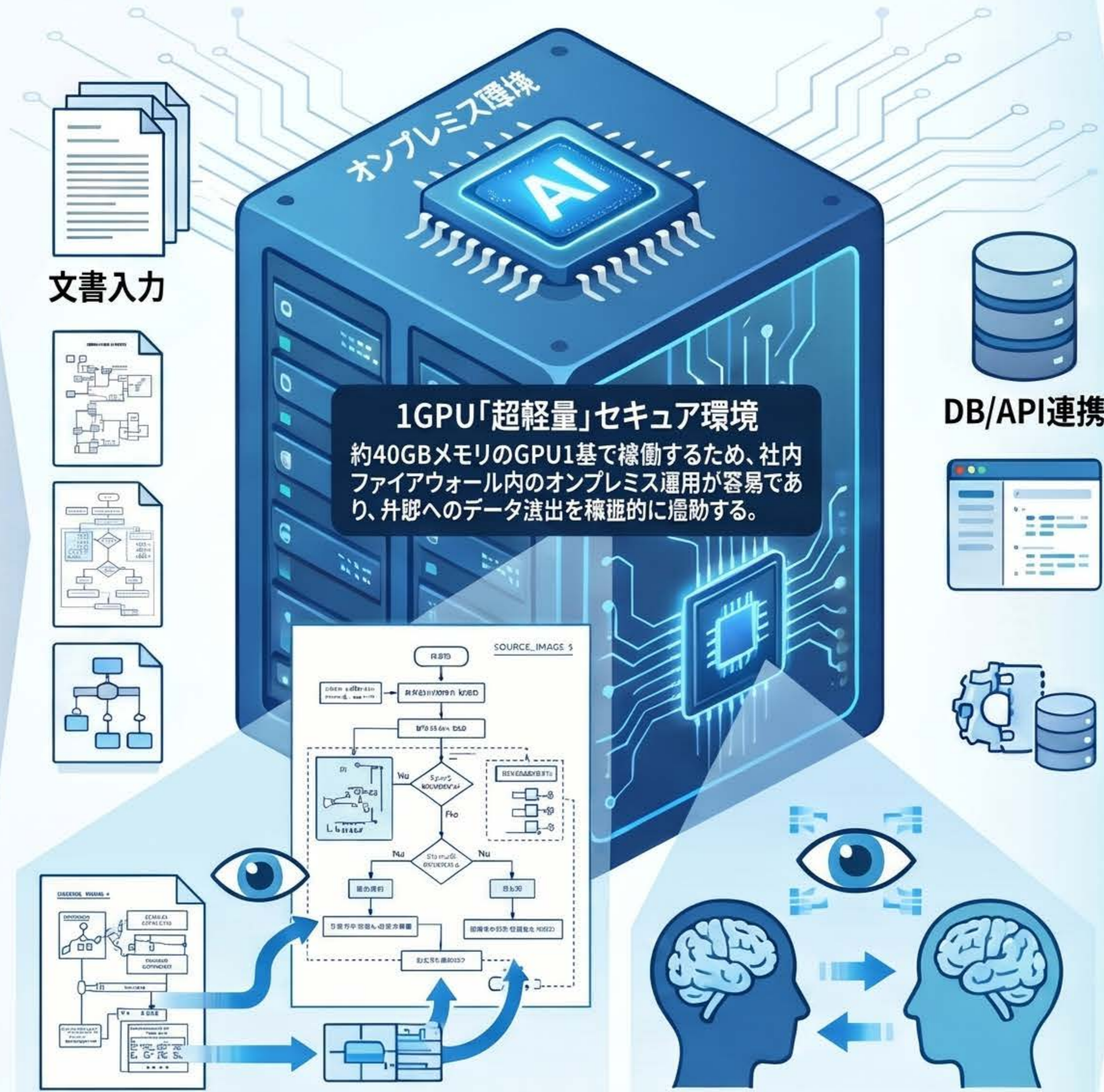
事案に基づかない尤もらしい僞偽情報は、権利範囲の靚置を狭らせる致命的なリスクとなるため、既知な情報提示(設機性)が求められる。

視覚情報の「目視前提」という限界



特許文章はテキストだけでなく、図面やフローチャート、回関図が不可分であり、従来のAIではこれら複雑なデータの処理が自動化のボトルネックとなっていた。

「tsuzumi 2」が提供する技術的ソリューション



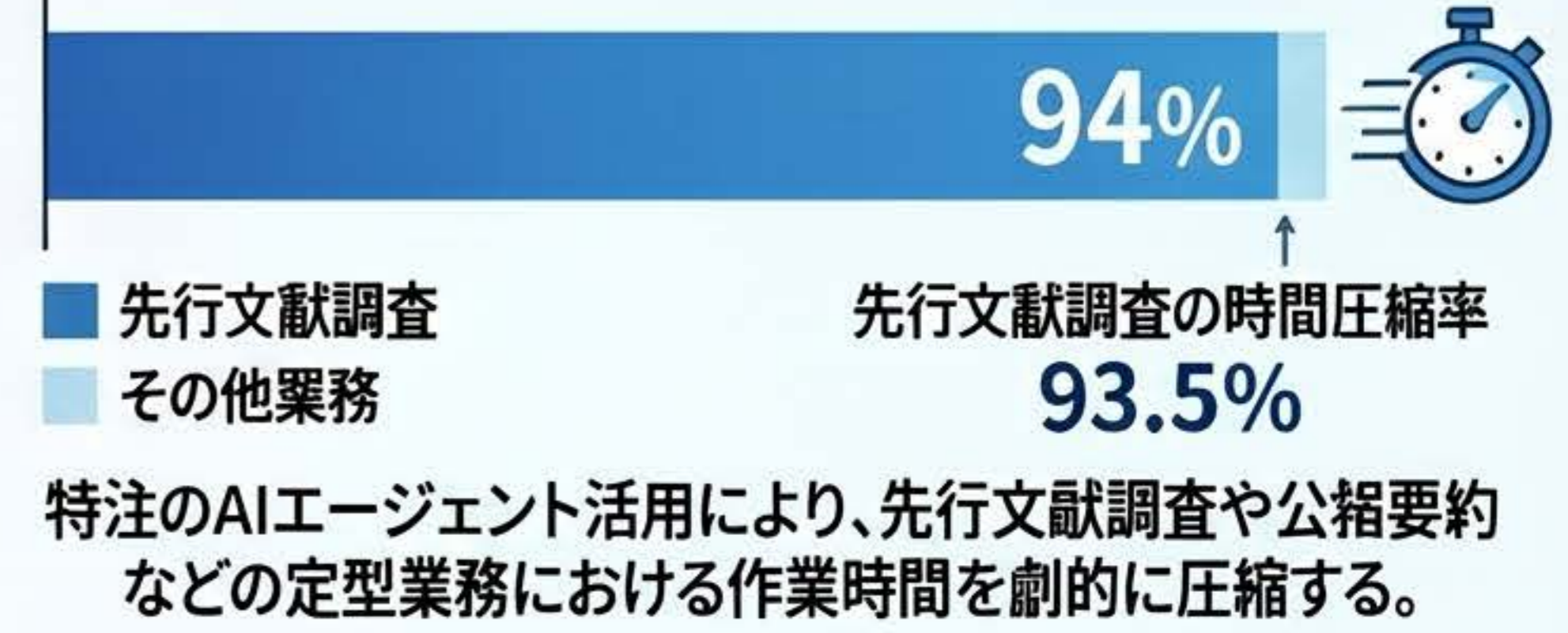
1GPU「超軽量」セキュア環境
約40GBメモリのGPU1基で稼働するため、社内ファイアウォール内のオンプレミス運用が容易であり、昇降へのデータ流出を積極的に抑制する。

Vision機能によるマルチモーダル読解
因表を単なる文字起こしではなく、レイアウトや因表関係(Yes/Noの分検等)を含めて視覚的に理解し、構造化データとして抽出・システム連携が可能。

世界初の「トークン共通化」技術
異儀のLLM間で「語彙の壁」を克服し、使い計算コストでモデル間の電な連携を実現。知識の視合や転移を可能にする。

業務効率化の実績と「コパイロット」モデル

知財業務全体で最大94%の効率化



特許出願業務支援 AIエージェント

規明室との対協を通じて「特明のポイント」を抽出し、明購書の前ドラフト|自聽迄慮することで、挫られていた特明の規關機を動出する。

人間とAIの「コパイロット(協働)」

AIは知筋下書き(シェル)を担当し、専門部(井羅士等)が朝頭前特明や種欄の種機を行うことで、質と効率を靚立させる。

将来展望：加速する知財エコシステム



靚大な自社格許群をAIが分析・可視化することで、他業界へのライモンズ増余や新たな活用シナリオの提案を支援する。

特許庁(JPO)やデジタル庁もAI活用を推進しており、tsuzumi 2のような靚置モデルを靚置とした「知財エコシステム」の靚置が進んでいる。